

# 聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

## 第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り②

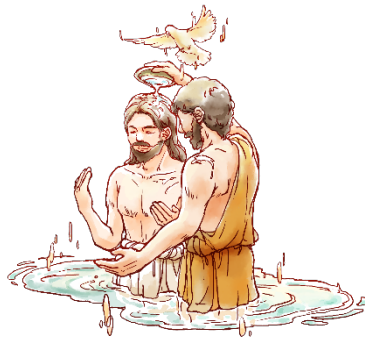


### 洗礼における祈り

#### 荒野での祈り

#### 使徒たちをお選びになる前の祈り

#### 洗礼における祈り



ヨルダン川での受洗以前にイエスが捧げておられた祈りについての記録はありませんが、定期的に祈っておられたことは確かでしょう。しかし、イエスの祈りについての最初の記述が受洗時だとみなすのは適切です。というのも、この受洗の場こそ、聖霊がイエスのところに下られた時だからです。神の子どもであれば誰も、父なる神にどのように呼びかけるかを知っているべきですが、聖霊に満たされたクリスチャンの祈りには特別な何かがあるはずです。また、洗礼におけるイエスの祈りを見ると、洗礼というものが単なる宗教的な儀式やお祝い、形式的な儀礼以上のものであるべきだということもわかります。洗礼はむしろ、このイエスの例におけると同様、父なる神との崇高な交わりの機会であるべきなのです。イエスが何を祈られたかは記録されていません。しかし、イエスが祈ると天が開き、三位一体の他の位格が驚くべき形で姿を現されたということは、その祈りの結果は決して小さなものではなかったのです。

さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上を下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ」

（ルカ 3:21-22）。

19世紀にも、クリスチャンが受洗時に聖霊に満たされる事例が無数に見られたそうです。これは注目に値します。この件に関しての聖書の例は他にはありませんが、そのようなことが起こることを否定するような聖書箇所もありません。

## 荒野での祈り

聖霊から特別に力を授かった後、イエスは同じく聖霊によって荒野へと導かれ（マルコ 1:12）、そこで試みを受けられました。この場面でイエスが祈っている記録はありませんが、これが多くの祈りの時であったことに疑いの余地はありません。聖書の記録によれば、この荒野の体験の後、「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた」（ルカ 4:14）とあります。働きのための力もさることながら、試みに打ち勝つ力を与えてくれるのもまた、祈りしか無いのです。

ヘブル人への手紙の著者は、イエスが「自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました」（ヘブル 5:7）と記しています。ここで語られているのは明らかにゲッセマネでの体験ですが、切なる祈りというものを荒野での試みの体験と結びつけることもまた、不適切なことではありません。

## 使徒たちをお選びになる前の祈り

使徒たちを選ばれる前にもイエスはお祈りになりました。この場面の重要性は、一晩中というその祈りの時間の長さを考えると明らかです。イエスはまさに、歴史上で最も重要な人物のうちに入る十二人を選ぼうとされていたのです。

このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。（ルカ 6:12-13）

これらの人々は神の建物の礎石となる人々でした（エペソ 2:20）。その名前は、天の都市の「土台石」に刻まれることとなっていました（黙示録 21:14）。その双肩には、イエスの教会の形成と未来とが委ねられることとなっていました。彼らはまた、イエスの地上での働きを担い、直接の教えをいただくばかりでなく、その死と埋葬、復活に際しては目撃者になることとなっていました。さらには、彼らもまた、ほぼその最後の一人に至るまで、自らの証しのために命を失うよう召されることとなっていました。イエスがなされた選択には永遠の結果が伴ったのです。その選択は（しばしば外見を判断基準として用いる）地上の助言ではなく、天の助言に従ってなされなければならなかったのです。

イエスの祈りの内容については記録されていないものの、その要点は、ユダの悲劇的な過ちの後に見られる、使徒たちの祈りにきわめて近いものだったのではないかと思います。「すべての人の心を知っておられる主よ。この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示してください」（使

徒1:24-25)。結果は明らかです。天からの助言により十二人が選ばれました。「すなわち、ペテロという名をいただいたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと熱心党员と呼ばれるシモン、ヤコブの子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである」(ルカ6:14-16)。これら選ばれた人々の家柄をざっと眺めてみても、この世的な視点しかない人物なら、同じ選択がなされていたかは疑わしいところです。長時間にわたり真剣に祈られたことで、イエスは天的な視点をいただくところとなり、彼らの任命は世俗的な考え方に影響されずに済んだのでした。

しかし、夜を徹して祈られたにしては、ユダのような、とんでもない失敗を犯すことになる人を選んでしまったのはどういうことか、と思う人もあるでしょう。ユダが過ちを犯すことを全知の神がご存じなかったのかというわけです。そして、もちろんご存じであったのだから、彼が選ばれるのをなぜ許されたのかというわけです。確かなことは、人の理解し得ない知恵をお持ちの神は、私たち人間のように考え、ふるまわれるわけではないということです。神は既に十分に語ってくださっています。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。I 主の御告げ I 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」(イザヤ 55:8-9)。

さらに思い起こすべきは、神の選びは人間が意志を用いることを排除するものではなく、その召命は、将来、反抗も失敗も起こらないことを保証するものでもないということです。神がユダの墮落をあらかじめご存じであったことは確かです (使徒 1:20)。人が反抗し失敗を犯すことをあらかじめご存じでありつつ召されることも明らかです。神が別の時にキシユの子サウルを選びイスラエルの王とされたこと (I サムエル 10:1) に、疑問の余地はありません。ところが、サウルは反抗し、過ちを犯し、拒絶されたのです (I サムエル 15:23)。